

# 松江観光における小泉八雲の文化資源的変遷

工 藤 泰 子

(総合文化学科)

Lafcadio Hearn's Transition to a Cultural Resource for Tourism in Matsue

Yasuko KUDO

キーワード：小泉八雲Lafcadio Hearn, 文化資源 Cultural Resource

## 1. はじめに

平成26年(2014)の松江市への観光入込客数(延べ数)96万人のうち、小泉八雲旧居、および、小泉八雲記念館の訪問者は、それぞれ約7万人(前年比88%)、約10万人(前年比91%)であった<sup>1)</sup>。松江市は小泉八雲の縁で、少年時代を過ごしたアイランドと深いつながりがあり、青年時代を送ったニュー・オーリンズ市とは友好都市関係にあることから、「アイリッシュ・フェスティバル in Matsue<sup>2)</sup>」や「リトル・マルディグラ in 松江<sup>3)</sup>」を開催している。

また、松江市は、平成25年(2013)3月、「また八雲が歩きはじめまち」をコンセプトに20年先を見据えた新たな長期ビジョン「平成の開府元年まちづくり構想」を策定している<sup>4)</sup>。このように、今日では、松江市のまちづくりや観光振興において、八雲は欠かせない存在である。日本の一都市のイメージに、これほど強い影響を与えている「外国人」は、おそらく、八雲以外にいないであろう。

拙稿(2015)では、八雲の存在が松江の文化資源として観光に活用されていく戦前の過程を論じた<sup>5)</sup>。そこでは、*Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894)(邦題「日本瞥見記」)ほか。以下「グリーン

プス」)が発行された後の明治末には、松江観光に八雲の存在を活かしていく計画があったこと、大正初期には小泉八雲旧居(以下「旧居」)が公開されたこと、しかしながら、実際に松江の文化資源として活用されたのは、大正15年(1926)の『小泉八雲全集』(第一書房)の出版により、八雲の名が「日本の恩人」「世界的文豪」として普及した以降であったこと、さらに、昭和4年(1929)の「ヘルン二十五周年追悼会」の挙行、「小泉八雲記念館(以下「記念館」)」の開館(1934)、および、昭和初期に観光行政組織が結成されたことで、旧居と記念館が松江観光の定番スポットと位置づけられていく様子を説いた。

本稿は、その続編と位置付け、戦時下から戦後復興期までを扱い、八雲評価の高まりと、それに連動した松江観光における文化資源としての変遷を明らかにする。

## 2. 戦時下における小泉八雲の存在

日本は、満州事変(1931)をきっかけに、それまで常任理事国であった国際連盟を脱退し(1933)、国際社会との間に距離が生じていく。

昭和12年(1937)7月7日、盧溝橋事件を発端

に日中戦争が勃発した。開戦に伴い、遊覧的、享樂的な観光は批判的となり、旅行制限が日増しに強化され、ついには、「観光」という語すら敬遠されるに至った。そんななか、国策に対応した観光振興を積極的に実施した例もある。たとえば、京都市の場合、いかに日本精神涵養に相応しい都市であるかを強調したり、伊勢、橿原神宮と合せた史蹟巡拝ルートを推奨したりすることで、時局に対応した観光事業を推進した<sup>6)</sup>。

八雲はアイルランドとギリシャにルーツを持ち、欧米での生活が長かったものの、帰化するほどの親日家であったことと、「日本の恩人」としてその名が知られていたことなどから、非常時下の日本においても特別な存在であった。

戦時下では、用紙の統制が図られ、出版業界も苦境に陥っていたが、昭和13年(1938)、第一書房は、国策に対応して戦時下に相応しい名著を「戦時体制版」シリーズとして出版する。八雲最後の著作 *Japan: An Attempt at Interpretation* (1904) は、その「戦時体制版」シリーズの『神国日本』(戸川秋骨訳)として発行された。訳者の「はしがき」には、次のようにある。

小泉ヘルン先生が、今日の言葉でいふ所謂親日家である事は、今さら喋々すべきところではない。けれども所謂普通にもて囃される親日家なるものとは、少しく選を異にしている、先生をそれ等の人と同列にしてみる事は如何かと思ふ。…

「神国日本」は、先生の最後の著作であるが、先生はこの一巻に於いて、日本に関して親接し又考察された、あらゆる事物を総合して、吾が思想、吾が精神の、真髓をつきとめ、それをかく表白したのである。即ちこの一巻は、その絶筆であると共に、先生の作の総てであるとも云ひうるのである。…先生のこの一巻こそ、現時に於けるいかなる書物にも勝って、適切に且つ一読に値ひするものと考えられる。いまや戦時体制版に、この書の加へられるに至ったのは、先生に対し、また世間に対し、訳者のひそかに欣びとするところである<sup>7)</sup>。(下線は引用者。以下同じ)

八雲が「普通にもて囃される親日家」とは異なること、本著が八雲の作品の「総て」であることを、戦時体制下にこそ「一読」すべき書であることを、訳者は述べている。第一書房が発行した「戦時体制版」シリーズについては、次のように説明されている。

…従って本体制版はその点特に留意して、今日及び今日以後の日本人が、日本人として起つ上には是非とも必要な万人必読の書を、精神の糧として供給することををもって使命とするものであります。

斯くして自然、本戦時体制版は、思想・芸術・宗教等の文化の各方面に涉って、古今東西を通じて現代日本に最も緊要にして重大意義ある名著のみの普及を計るものであります。

今や史上未曾有の重大時機に際会している私達は、国をあげて長期建設に邁進して居ります。而も戦後と雖もなほ国力総動員を要し、所謂『常在戦場』の気力が飽くまで必要であることは言ふまでもなく、私が声を大にして本シリーズ(原文ママ)を戦時体制版と呼号するもの此の意味に外ならないのであります…<sup>8)</sup>。



写真1 「戦時体制版」シリーズ  
画像出所：小泉八雲著(戸川秋骨訳)『神国日本』  
「追録」第一書房、1938年。

このとき第一書房から出版された「戦時体制版」シリーズは全15冊であった（写真1）。本作もその中の一冊であるが、『神国日本』という邦題は、それ以前からも使われている。それは、米国マクミラン社初版の書扉、中扉に「神国」の字が用いられたためである<sup>9)</sup>。戦時下においては、この「神国」という語が、国策に乗じた出版をするうえで都合よく使われていく。

八雲関連の施設をみると、記念館の開館（1934）は、日本が国際連盟を脱退し、次第に国際社会（連合国）から孤立していく時期であった。その後も、上野帝国図書館に八雲の碑設立（1935）<sup>10)</sup>、早稲田大学に八雲の肖像画設置（1935）<sup>11)</sup>など、戦時下において、八雲評価の高まりが読み取れる。

さらに、昭和15年（1940）7月25日、旧居は「史蹟名勝天然紀念物保存法」（1919年公布・施行）によって「史蹟」に指定された<sup>12)</sup>。日中開戦後においても、文部省（国）が八雲に対して好意的であったことがわかる。また、昭和16年（1941）の『読売新聞』に、簡素な八雲の墓標と成金趣味の漱石の墓標を比較し、八雲の人柄を賞賛する記事もあった<sup>13)</sup>。このように、戦時中も、日本における八雲の評価は比較的好意的であったといえる。

しかしながら、戦争の激化に伴い、八雲関連の新聞記事は激減していった。生きることに必死で、文学や、書物そのものに関心を向ける余裕がないゆえに、「日本の恩人」八雲の存在は次第に人々の記憶から薄れていったようだ。

また、戦時下の憲兵の対応について、伊藤（1980）は、根岸磐井氏<sup>14)</sup>の夫人で、夫の死後、その意志を継いで八雲の旧居を守り抜いた根岸菖蒲さんからの伝聞を、次のように述べている。

戦時中、憲兵が押しかけ、この非常時にたか  
が一人の毛唐が住んでいたというだけで、広い  
庭に畑もつくらず、防空壕も掘らないとは何事  
かと壊しにかかれた。そのとき、菖蒲さんは、  
皇族なども名前をつらねた芳名録を見せ、お上  
に弓をひく気なのかと逆襲し、憲兵たちを退散  
させたと聞く<sup>15)</sup>。

史蹟に指定されたことで、旧居の屋敷とその庭園は法律で保護されていたが、そのことに對し、敵意のまなざしを向けるものもあった。また、「毛唐」という言葉からも憲兵の感情が読み取れる。

旧居は、根岸家の人々によって戦争中の破壊の危機を免れ、その後も代々受け継がれ、今日に至っている（写真2）。



写真2 今日の小泉八雲旧居  
「史蹟」指定の碑が残る。（平成27年10月筆者撮影）

### 3. 戦後復興期の観光松江と小泉八雲

#### 1) 戦後の再評価

敗戦後、八雲の存在は松江の都市イメージ形成に影響を与え、文化資源として観光に活用されるようになった。その大きな転換期となったのは、昭和25年（1950）6月に開催された「小泉八雲生誕百年記念祭」であろう。

戦前から八雲の著作を通して日本を知る西洋人は多かったが、天皇の免責工作に関わったとされるマッカーサーの軍事秘書ボナ・フェラーズ准将も、八雲の日本観に強い影響を受けた一人であった<sup>16)</sup>。しかしながら、アメリカにおける八雲評価が高かったのに対して、戦後の日本、そして松江においては、「日本の恩人」の存在を再び思い起こすまでに少々時間を要する。



敗戦後間もない日本は、掌を返したように外貨獲得をもくろみ、外国人観光客誘致に向けて動き出した。ところが、「国際」、「観光」を重視しながらも、観光にかかわる報道で、八雲の名前はなかなか出てこない。その兆しが垣間見られるのは、昭和23年（1948）頃であった。それまでの動きを追ってみよう。

昭和22年（1947）8月、日本は民間貿易を再開し、それ以後、国際観光を取り巻く環境が好転する。それまで進駐軍関係者を対象としていた国際観光から一転、バイヤー（外国人貿易業者）向けの対応に追われる<sup>17)</sup>。また、昭和21年（1946）11月、伊勢志摩国立公園が指定されると、全国的に国立公園指定の要望が高まり、同時に、国際観光熱も高まっていく。松江においても、バイヤー向けの宿泊施設の整備や、大山国立公園への拡充編入の期待が高まり、観光地としての開発と、外客誘致について連日報道される<sup>18)</sup>。しかし、この時期においては、「国際」や「観光」関連の報道に、八雲の名前は表れない。

戦後、内閣総理大臣に任命された幣原喜重郎は、アメリカ・ワシントンにおける会議に出席し、会場で出会った米婦人から、八雲の著作によって日本人を知り、日本を好きになった米英人がいかに多いかを聞かされたという<sup>19)</sup>。幣原は、そのような親日派の米英人から、敗戦国日本を見守る優しい態度を感じ取ったのである。しかし、昭和23年（1948）、松江を訪れた幣原は、地元松江で八雲の存在があまりにも軽んじられていることに驚く。「西洋人があれ程よくヘルンを知っているのに、日本人の彼を知ることの少いに驚く、殊に松江で彼の本がよく読まれているのは不思議なこと<sup>20)</sup>」と嘆いている。戦後において、八雲の名前が松江を象徴する人物として報じられるのは、このあたりからであろう。

昭和23年（1948）5月、松江で開催された全日本観光連盟第三回総会の祝辞の中で、進駐軍の軍政部隊長（C.L.モーザート中佐）は次のように述べている。

…本県（島根県）は全国で最も美しい土地であります、城山のゆかしさ、宍道湖の静けさ、は

るかに望む大山の偉容、隠岐の奇勝など本県の豊かな景観は文豪ヘルンを誘い大作をなさしめたのであります、この自然的条件に加うるに道路交通機関の整備、宿泊設備の完備を以てすれば島根県は内外の遊覧客を誘致し観光日本最大の誇りたることを立証するでありましょう…<sup>21)</sup>。

ここでは、八雲自身というより、「文豪ヘルン」を魅了するほどの美しい島根、八雲のお墨付きを得た島根、といった文脈で八雲の名前が使われている<sup>22)</sup>。実は、これより一年前、同氏は別の行事（昭和22年9月16日開催、松江観光協会創立総会）で祝辞を述べていたが、その際には八雲に言及していない<sup>23)</sup>。

また、昭和23年（1948）秋、「忘れられた観光松江の足もと」と題した記事で、同年に開催された「貿易と観光大博覧会」でにぎわった市内において「取り残されてかえり見られない個所」として道路舗装や橋の修復の必要性が報じられた<sup>24)</sup>。そのなかで、「へるん旧居」近くの北堀新橋が今にも崩れそうなほど腐敗しているという指摘もある。このことは、八雲関連の観光スポットがそれまでいかに軽視されていたかを裏付けている。旅館の従業員ですら、観光客にハーンの旧居はどこか訊かれても、答えられないことがあったという<sup>25)</sup>。

このように、戦後の松江では、かつての「日本の恩人」が忘れられた存在であったが、昭和23年（1948）頃から、松江そして松江観光の象徴として、八雲の名前が再び見られるようになる。さらに、それから2年後の昭和25年（1950）、その地位が確固たるものになる。

## 2) 小泉八雲生誕百年記念祭

昭和25年（1950）は八雲生誕百年にあたる年であった。この「小泉八雲生誕百年記念祭」は、市河三喜博士、アメリカのP.D.パーキンズ、田邊隆二ら英文学者が中心となって、「日本全国の国際的な記念事業として」企画したもので、「ヘルンに最もゆかりの深い松江市で催したい」という発起人らの意向で松江市に導入されたものだった<sup>26)</sup>。これを契機

に、「ハーンはハーンとして別に扱うではなしに、それ等と一緒に観光の中へ融けこんでもらいたい<sup>27)</sup>」と市議会議長が述べたように、八雲を取り巻く文化は、松江観光と一体となり、その中心として位置づけられていく。八雲生誕百年祭は、同年最大の観光事業として全力が注がれたのである<sup>28)</sup>。

昭和25年(1950)1月、小林誠一松江市長は、松江市に「ハーン図書館」を設立すべく、市観光文化課長I氏を「ハーン文庫」を持つ富山大学に派遣し、蔵書の譲渡を懇願した<sup>29)</sup>。結局、富山大学からは断られてしまったが、松江市教育委員会は、このことを「現在ハーンの蔵書は富山高等学校にあるがこれを松江に返却してもらうように運動を展開するという計画<sup>30)</sup>」と記している。八雲の蔵書は松江市に属するもの、という前提である。

同年3月18日、松江市は、小林市長を委員長として英文学者らと「小泉八雲生誕百年記念委員会」を結成し<sup>31)</sup>、次の「ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)生誕百年記念事業に関する決議案」を第七回臨時国会に提出した。

#### ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)生誕百年記念事業に関する決議案

本年はラフカディオ・ハーン(小泉八雲)生誕百年にあたる。この時にあたりわれらは真に日本を理解し、日本を愛し、日本に関する幾多の著作をなして、これを世界に紹介したこの国際的文筆を顕彰すべきである。このことは、われら自らが自己を再発見し、又この偉大な文豪がわれらに寄せた深き理解と愛情とに報いる所以であり、延いては現下我国に対する諸外国人の認識と同情とを勝ち得る最大の時代的要務であると信ずる。よってかかる意義ある顕彰は、速やかに国家がこれを企画し、且つ施行すべきである。

右決議する<sup>32)</sup>。

敗戦で自信を消失した日本にとって、かつて八雲に高く評価され、世界に紹介されたということが、自信につながる。戦後復興期の日本において、八雲

を顕彰することは、諸外国からの「認識と同情」を獲得する手段、すなわち国益につながることを意味していた。決議案では、そういった理由から国家事業として八雲を顕彰すべきだと述べている。衆議院本会議における、地元出身Y代議士の説明をみてみよう。

…彼が松江に赴任するや、それまでの外国人教師とはまったく異なり、人種や宗教上の偏見などはみじんもなく、日本の国柄に対して心から尊敬の念を持ち、日本的な思想を外人には珍しいくらい深く理解し、学校においては、日本人が言語系統の異なる英語を習得することの困難さをよく了解して、その講義は懇切丁寧をきわめたので、松江における彼の人気はすばらしいものがありました。…富士山や芸者ガールさえ、まだ世界に広くは知られていないころから、彼は日本に対する限りない愛と理解とをもつて、この国土の有するうるわしい風光や、珍しい風俗習慣や、素朴な人々の生活をつぶさに観察し、流麗にしてしかも無限の滋味あふるるがごとき彼の文体に託して随筆とし、論文とし、物語として、世界の人々に紹介したのであります。彼の作品ほど世界中に多くの日本びいきをつくつたものはありません。…また彼は、常に日常の行動において、不正、不義、卑劣、惨忍等の行いに対しては仮借なき反撃を示し、陰險邪惡の徒輩への限りない憎惡の念を、だれはばかりことなく示しているのであります。彼こそ、敗戦の痛手にとかくくじけて自己を失いがちな現在の日本国民に多大の教訓を与えるものと思うのであります。これらの観点からしても、この偉大な国際的文豪を顕彰することはわれらの要務であると考えるのであります<sup>33)</sup>。

このとき、文部大臣高瀬莊太郎は政府の所見として、我国文化の世界的認識を深め、その世界的な価値を高めたとして、八雲の功績を顕彰する生誕百年記念事業に対し、「できるだけ努力をいたしたい所存であります」と答えている<sup>34)</sup>。

敗戦後という時期だからこそ、自信を消失した日本国民には、海外に日本の姿を知らしめた八雲の存在が必要なのであった。この提案は衆参両院で可決され、小泉八雲生誕百年祭は、国家事業として位置づけられることとなった。

その後、松江市は「ラフカディオ・ハーン生誕百年記念事業に関する請願」を提出した。それは、八雲の偉業顕彰を目的とした、下記の壮大な施設計画である。

- ① ハーン文化会館の建設
- ② ハーン・スタジアムの建設
- ③ ハーン図書館の建設
- ④ ハーン旧居の保存
- ⑤ ハーン文学賞の設定
- ⑥ ハーン奨学金の設定<sup>35)</sup>

この請願は、参議院本会議において全会一致で採択され、内閣に送付された<sup>36)</sup>。しかし、これらの事業にかかる費用の出所については明確にされていなかった。市当局は、この壮大な事業にかかる約1億5千万円もの資金を国が提供するものと考えていたが、一方の政府側では、八雲記念祭の開催に賛同しただけで、施設事業への予算化はまったく考えていなかった。このように、両者の思惑には大きな齟齬があった<sup>37)</sup>。

予算の問題が解決できず、大規模な施設は実現しなかったものの、八雲生誕百年記念祭は盛大に行われた。記念行事の主催は、「松江市・島根新聞社・小泉八雲生誕百年記念委員会（委員長：小林誠一市長）」であった。主な行事は、小泉八雲生誕百年記念式典（6月27日）を中心に、小泉八雲記念展（6月25-30日）、花火大会（26日夜）、鑿行列（27日）などであった（写真3）。

## 小泉八雲生誕百年記念行事

美しき日本の夢世界に紹介した小泉八雲「ラフカディオ・ハーン」生誕百年を迎え八雲に最も  
かり深い松江市および小泉八雲生誕百年記念委員会  
会、島根新聞社は八雲をたゞる次の記念行事  
を行い、先鞭をのぎとりました。各界の協力を  
お願いいたします。

**小泉八雲記念展**  
△会期 六月二十五日から三十日まで六日  
△会場 松江城山ユネスコ会館

**小泉清絵画展**  
△会期 六月二十七日から七月一日まで五日間  
△会場 松江市公会堂

**花火大会**  
△会期 六月二十六日夜  
△場所 松江  
湖岸中央埋立地、山陰地方に接する伝  
説を誇る八雲郡島根町の螢火師により  
三つの綺麗な花火を断断なく湖上に  
打ち揚げ不夜城の壯麗を披露する

**名物ドウ行列**  
△会期 六月二十七日午後一時より  
△参加町 石橋町三丁目、同一丁目  
殿町、伊勢宮町、和多見町、上庄町、幸  
町、西条町、幸町、土手町以上参加町  
△行進路 略し難波小学校付近へ集合、市内  
主要街を行進する。前記参加決定および参  
加予定町のほか参加希望の町は補助金および  
供品があるので至急島根新聞社文化財部八雲記  
念祭係まで申出てください。

なお個別行事として市が行う水郷祭は本年とこ  
この八雲記念祭に吸収、一大行事として取りあ  
はせることになっている。

主 松 江 市・島 根 新 聞 社  
催 小 泉 八 雲 生 誕 百 年 記 念 委 員 会

写真3 小泉八雲生誕百年記念祭行事 出所：『島根新聞』6月12日付新聞広告

毎夏恒例の松江の水郷祭は、この八雲記念祭に吸収され、一大行事となった。記念式典翌日の『島根新聞』から、当日の様子をみてみよう。

記念式典会場となった市公会堂には、半身大の八雲の肖像が飾られ、三男清氏夫妻、令嬢蘭子さんをはじめ、英国大使代理レッドマン夫妻、英国政府派遣教授フレーザー夫妻、文学者デル・ロイらを迎え、国内外から千余名が列席した。小林松江市長の挨拶にはじまり、市河三喜博士の挨拶、旧居の当主根岸菖蒲さんに市長から感謝状の贈呈、続いて、吉田茂

首相、衆参両院議長、東大総長、パール・バック女史ら錚々たる面々からの祝電披露を受け、小泉清氏は感謝の言葉を述べた。その後、フレーザー、前田多門両氏の記念講演、友井バレエ団による「雪女」初公演があり、午後一時に閉会。同日の夜は「ハーンの夕べ」が開かれ、西崎一郎、阿部知二両氏の講演、ハーンをたたえる歌の発表会、友井バレエ団「雪女」ほかの公演があり、参加者から絶賛された。これらの様子は、国内外で報道された<sup>38)</sup>。また、25日には「ハーン祭子供大会」が市公会堂で開かれ、



松江一中生徒による合唱「ハーンをたたえる歌」や、ハーン童話、舞踊などが披露され、市内約3千名の小中学校生徒たちを喜ばせた<sup>39)</sup>。

このように、八雲生誕百年記念祭を契機に「八雲の町」としての松江は国内外に情報発信され、同時に、地元の小中学生に八雲の存在、八雲と松江とのかかわりを教育する機会となった。

さらに、記念事業に関する国会請願で東京に出張していた松江市観光文化課長は、記念祭とは別に、「国際文化観光都市建設法案」の提出を示唆された<sup>40)</sup>。周知のように、松江市は、奈良市、京都市に次ぎ、昭和26年（1951）3月1日、「松江国際文化観光都市建設法」を成立する。それは、後の松江市にとって大きな「ブランド」となるが、そのきっかけとなったのが、この八雲生誕百年記念祭であった。

#### 4. むすびにかえて

以上のことから、次のことが明らかになった。

戦前、全集発行をきっかけに全国的に八雲評価が高まり、それと連動して、八雲は松江観光の重要な観光資源として位置づけられた。しかしながら、敗戦後、松江市は観光事業の発展に力を注ぎ、「貿易と観光大博覧会」で市内にはぎわったものの、「日本の恩人」の存在もほとんど忘れられ、八雲関連の施設やその周辺はほとんど放置されていた。観光業に従事する人すら旧居の存在を知らないほどであった。この状況が一変し、八雲が松江を表象する存在となるきっかけとなったのは、昭和25年（1950）6月に開催された「小泉八雲生誕百年記念祭」であった。「松江国際文化観光都市建設法案」の提出を示唆されて以降の動きは、別稿で論じたい。

#### 【謝辞】

本研究にあたり、鳥根県立大学短期大学部小泉凡教授よりご助言いただきました。心より御礼申し上げます。

#### 【付記】

本研究は、平成27年度鳥根県立大学短期大学部松江キャンパス学術教育研究特別助成金を受けて実施した成果の一部である。

#### 【注】

<sup>1)</sup> 松江市「平成26年松江市観光入込客数及び宿泊客数の集計結果（4月15日）」

(<http://www1.city.matsue.shimane.jp/shisei/kouhou/houdou/2015/04/0553.html>最終閲覧2015年10月16日)

<sup>2)</sup> St. Patrick's Day（3月17日）を祝うアイルランド最大のお祭にちなむイベント。松江では、日本アイルランド国交樹立50周年にあたる、平成19年（2007）、「セント・パトリックス・デイ パレード in Matsue」としてスタートし、22年（2010）より「アイリッシュ・フェスティバル in Matsue」となった。（山陰アイルランド協会HPより。

<http://www.sanin-japan-ireland.org/parade/index.html>最終閲覧2015年10月16日)

<sup>3)</sup> ジャズの発祥地、ニュー・オーリンズで開催される、世界で最も有名な謝肉祭のひとつ。Mardi gras。「肥沃な火曜日」の意。松江では、平成24年（2012）、小規模なパレードに始まり、翌25年（2013）から「リトル・マルディグラ in 松江」としてスタートした。（「リトル・マルディグラについて」リトル・マルディグラ2015実行委員会HPより。

[http://www.little-mardigras.com/about/about\\_lmg.html](http://www.little-mardigras.com/about/about_lmg.html)最終閲覧2015年10月16日)

<sup>4)</sup> 小泉八雲が海外に紹介した松江の良さを再発見し、それを市民が誇りに感じられる町づくりを目指すもの（松江市『平成の開府元年まちづくり構想—また八雲が歩きはじめるまち』2013年）

<sup>5)</sup> 拙稿「戦前松江における文化資源としての小泉八雲」『日本観光研究学会第30回全国大会学術論文集』41-44頁、2015年。

<sup>6)</sup> 拙稿「戦時下の観光」『京都光華女子大学研究紀要』第49号、51-62頁、2012年。

<sup>7)</sup> 小泉八雲著（戸川秋骨訳）『神国日本』「はしがき」1-2頁、第一書房、1938年。

<sup>8)</sup> 第一書房 長谷川巳之吉「戦時体制版の宣言」、同上。

<sup>9)</sup> 小泉八雲著（平井呈一訳）『日本：一つの試論』恒文社（口絵）、1989年。

<sup>10)</sup> 『読売』1935年7月2日付。

- 11) 『読売』1935年10月2日付。
- 12) 『朝日』1940年7月26日付。
- 13) 『読売』1941年9月14日付。
- 14) 松江城北にある「旧居」は、根岸磐井の父干夫から八雲が賃貸したものであった。八雲転居後、盤井は旧居の保存公開に尽力した。
- 15) 伊藤益臣（1980）「八雲旧居おなごあるじー根岸菖蒲さんの小泉八雲」『思想の科学』6（125）、54頁、1980年。
- 16) 岡本嗣郎『陛下をお救いなさいましー河井道とボナ・フェラーズ』ホーム社、2002年。
- 17) 拙稿「占領下日本の国際観光政策」京都光華女子大学・国際英語学科編『異文化の出会い』大阪教育図書、205－230頁、2008年。
- 18) 民間貿易が再開された昭和22年（1947）8月の『島根新聞』には、連日観光関連の記事が掲載された。「社説 観光地と衛生観念」（8月3日付）、「観光基地を設けよ」（8月5日付）、「観光事業をどう見る」（8月14日付）、「さあ船出だ平和日本・前途は明るい！貿易館、ホテルも設計…」（8月15日付）など。
- 19) 『島根新聞』1948年5月4日付。
- 20) 同上。
- 21) 『島根新聞』1948年5月17日付。（括弧内は引用者。以下同じ）。
- 22) このような文脈は、のちに「松江国際文化観光都市建設法案」の審議過程でもみられる。
- 23) 『島根新聞』1927年9月16日付。
- 24) 『島根新聞』1948年10月20日付。
- 25) 松江市教育立地委員会編『教育立地計画 第一集』松江市教育立地計画委員会、449頁、1951年。
- 26) 同上、458－459頁。
- 27) 同上。
- 28) この年は、不昧公生誕二百年とも重なり、松江市を象徴する二大スターの顕彰年であった。
- 29) 柳本晃一『激動の二十年』毎日新聞社、2頁、1965年。
- 30) 松江市教育立地委員会編、前掲、444頁。
- 31) 『島根新聞』1950年3月30日付。
- 32) Y議員ほか121名による提出。[『官報号外 第7回衆議院会議録第三十一号』（1950年3月29日）]。
- 32) 同上。
- 33) 同上。
- 34) 『第七回国会衆議院文部委員会議録第二十一号』（1950年4月25日）。
- 35) 『参議院会議録第四十九号』（1950年5月2日）。参議院本会議については確認できたが、衆議院の本会議については未確認である。
- 36) 『島根新聞』1950年4月29日付。
- 37) 『島根新聞』1950年6月28日付。
- 38) 『島根新聞』1950年6月26日付。
- 39) 「（生誕百年記念祭とは）別に、「国際観光文化都市法案」を出したらという意見もあったので、私も市民の世論を聞いて作りたいと思う…」（当時の市観光文化課長の言葉）（『島根新聞』1950年4月30日付）。

（受稿 平成27年11月9日，受理 平成27年12月24日）